

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

産後早期に助産師の産後ケアを受けた女性の経験

著者	市川 香織
学位名	博士（看護学）
学位授与機関	武蔵野大学
学位授与年度	2017年度
学位授与番号	32680甲第38号
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000832/

博 士 学 位 論 文

内容の要旨及び論文審査結果の要旨

第 4 号

2 0 1 7 年 9 月

武蔵野大学大学院

は し が き

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条による公表を目的として、
2017 年 9 月 15 日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨及び論文審査の
結果の要旨を収録したものである。

目 次

氏 名	学位記番号	学位の種類	論 文 題 目	(頁)
市川 香織	博士甲第38号	博士（看護学）	産後早期に助産師の産後ケアを受けた女性の経験	・・・ 1

氏 名	市 川 香 織
学 位 の 種 類	博士（看護学）
学 位 記 番 号	甲第 38 号
学位授与の日付	2017 年 9 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	産後早期に助産師の産後ケアを受けた女性の経験
論 文 審 査 委 員	主 査 武蔵野大学 教授 杵 淵 恵 美 子 副 査 東京医科歯科大学 教授 大 久 保 功 子 副 査 武蔵野大学 教授 齋 藤 泰 子

論文内容の要旨

【目的】産後にケアを受けたことは女性にとってどのような経験であったのか、その経験は女性にとってどのような意味があるのか、産後早期に産後ケアを受けた女性の経験の語りを現象学的に分析することにより、その構造を明らかにする。

【方法】現象学的アプローチを用いた質的記述的研究とした。産後 2 か月までに産後ケアを受けた女性に申し出ていただき、研究協力者としてインタビューに協力してもらった。インタビューはプライバシーに配慮し拒否権を保証した上で行った。非構造化インタビューの形式を取り、「産後に他者からケアされたということは、あなたにとってどのような経験でしたか」について自由に語ってもらった。インタビューデータはすべて文字化し叙述とし、ジオルジの分析手順を援用して、それぞれの研究協力者の経験の構造を記述した。その上で 5 人の経験の構造から導き出された構造を記述した。

【結果】A の経験からは、【休んで初めて疲れていたことに気づいた】、【休んだら何となく前向きな気持ちになれた】、【児に合わせればいいと気づいた】、【ゆっくり考える時間を

もらい頭の整理がついた】といった構造が導き出された。B の経験からは、【右も左もわからずてんてこ舞い】、【少しずつ自信をつけてもらう】、【出産は想像していた以上に体にダメージがあった】、【疲れて思考が狭くなるとネガティブになる】、【よりどころがあるから頑張れる】といった構造が導き出された。C の経験からは、【産後の自分の心の安定だけが心配】、【いつでも困った時に相談できる「場」ができた】、【第 1 子の産後に比べはるかに心が安定した】、【上の子に対しても夫に対しても余裕ができた】といった構造が導き出された。D の経験からは、【出産した医療施設はゆっくり休めずとにかくしんどい】、【私のことを第一に考えてもらえた】、【すんなり育児ができるようになった】、【気持ちが穏やかになり優しい気持ちになる】といった構造が導き出された。E の経験からは、【児がかわいそうで自分の休養より優先せざるを得ない】、【実家の両親にせかされストレスがたまる】、【夫の家族へのストレスがたまる】、【夫と夫の家族には頼れない】、【徹底的に休ませてもらい余裕ができる】といった構造が導き出された。5 人の経験より、産後ケアを受けた女性の経験として、1) 出産後の身体的な苦痛がある中で医療施設主体のスケジュールをこなす、2) 身体的な苦痛が続く中「自分のことは二の次」にして育児を始めざるを得ない、3) 医療施設の機械的な指導だけを頼りに育児が始まる、4) 家族には頼れず気を遣う、5) 「私を第一に」考えて休ませてもらい張り詰めていた緊張が初めて解ける、6) 私と児に合った方法を見つけられるように寄り添ってくれる存在に安心する、7) 身体の回復とともに精神的な安定が訪れ気持ちに余裕ができる、8) 後回しにしていた自分のことを考える時間が持てて頭の整理がつく、9) これからも困った時に頼りにできる「場」ができ安心して育児ができるという 9 つのテーマが見出された。

【考察】女性の経験の語りから、産後ケアを受ける前は、女性は出産による身体的ダメージを抱えながら他者のペースで産後を過ごしていることが明らかになった。女性たちは助産師の産後ケアを受けたことで初めて他者に気遣われ、「自分」を取り戻していた。産後ケアにより、「私を第一に」気遣われること、寄り添ってもらうこと、時間をもらうこと、つながりを持てることを経験し、自分を取り戻し、前向きに安心して育児をしていく原動力を得ていた。産後ケアを受けた女性の経験の意味を検討し、出産施設においては産後早期の女性をもっと気遣い、女性がしっかりと休養できるよう、スケジュールや環境の見直しをする必要があること、産後ケアを必要とする女性が産後ケアを活用できるよう推進すること、そして社会における産後の女性に対する理解を深める必要性があることが示唆さ

れた。

論文審査結果の要旨

産後の女性が特別な存在として扱われ、一定期間家事や労働から切り離され隔離されて過ごす習俗は「穢れ」に根ざす一方、母体の健康を守るために療養し、育児技術を身につける仕組みであったとも考えられる。このような習俗が廃れた現代の日本における出産後の女性を取り巻く状況は、家族からのサポートの減少や産後入院期間の短縮化による育児技術の習得不足などから、育児困難感や育児不安を抱えやすい状況となっている。そのため、産後ケアの必要性が高まり、政府は「産後ケアの強化」や「妊娠・出産包括支援モデル事業」などを推進している。しかし、産後ケアとはどのようなケアを指すのか、効果はあるのか、女性にとって産後ケアを受けることはどのような意味があるのか等、産後ケアを推進していくための根拠となる研究は不十分なままである。そのため、本論文では産後ケアを受けた女性の語りを現象学的に分析することにより、産後にケアを受けたことは女性にとってどのような経験であり、どのような意味があるのか明らかにしようとした。「産後ケア」の用語とは、本論文において、産後の女性の身体的・精神的のみならず社会的なニーズに対するケアも含んで定義されている。

著者は、宿泊型の産後ケアを実施している助産所等で研究参加者を募集し、産後2ヵ月までに宿泊して産後ケアを受けた女性5名から非構造化面接によりデータを収集した。得られたデータは、A. Giorgi による方法を援用して分析が行われた。研究参加者の語りから、「出産後の身体的苦痛がある中で医療施設主体のスケジュールをこなす」「身体的な苦痛が続く中『自分のことは二の次』にして育児を始めざるを得ない」「医療施設の機械的な指導だけを頼りに育児が始まる」「家族には頼れず気を遣う」という産後ケアを受ける前の女性の経験内容と、『私を第一に』考えて休ませてもらい張り詰めていた緊張が初めて解ける」「私と児に合った方法を見つけられるように寄り添ってくれる存在に安心する」「身体の回復とともに精神的な安定が訪れ気持ちに余裕ができる」「後回しにしていた自分のことを考える時間が持てて頭の整理がつく」「これからも困った時に頼りにできる『場』ができ安心して育児ができる」という産後ケアを受けた後の経験内容が明らかになった。

これらの結果から、女性は出産による身体的ダメージを抱えながら新生児を含めた他者のペースで産後を過ごしていること、他者(特に産後ケアの提供者である助産師)に気遣われて初めて「自分」を取り戻していること、産後のケアとして積極的な休養が必要であることが示された。また、社会全体が産後女性への理解を深めること、産後の女性への支援として敬意や愛情、信頼といったケアリングの実践の重要性が看護への示唆として提示された。

審査委員会では、本研究は著者が長年関わってきた産後の女性達への看護実践が元になっており、女性達に深く関心を寄せ研究に取り組む真摯な姿勢が評価された。さらに、産後の女性へのケア内容やケアの量ではなく、ケアを受けた女性自身がケアをどのような経験として感じたのか、どのような意味があるのかというこれまでの研究には欠けていた点に着目したことの意義が評価された。

データ分析結果で示された女性の経験内容は、これまで考えられてきた以上に産後の女性が身体的苦痛を感じ疲労していることを示しており、また、それにも関わらず女性は自分のことを二の次にして医療施設や家族・新生児のペースに合わせて生活し育児に没頭しているという姿である。産後の女性は自分から進んで休養することはできず、産後ケア施設を利用し、助産師から「私を第一に」ケアされて初めて自分の疲労状況に気づき、育児による緊張からも解放され、気持ちに余裕が生まれ、寄り添ってくれる存在に安心感を得ていた。これらのことは、妊娠中の女性に対する出産準備教育や出産直後に医療施設内で提供される産後の女性へのケア改善の必要性を示すものである。また、産後ケアが産後に支援を受けられない女性のための福祉的な事業ではなく、出産を終えたすべての女性の身体的・心理社会的回復のための支援である可能性を指摘した点で意義深い。

なお、本研究で明らかにされたことは、産後ケアを提供する施設がまだ少ない中で、限定された施設の利用者の経験であることを念頭に置く必要がある。今後の課題として、現象学的なデータ分析方法のさらなる習熟により、研究参加者により語られた言葉による相手の内面世界の表現がより豊かになるであろうと指摘された。

以上より、本論文は看護学へ十分貢献できる学術的価値のある内容であり、著者は博士(看護学)にふさわしい見識を有していると認められた。